
帰国渡日児童生徒つながる会

第1章 プロジェクトの概要など

1. プロジェクトの名称、目的など

このプロジェクトの名称は「帰国渡日児童生徒つながる会」である。現在、京都府内の学校には「外国にルーツを持った子どもたち」が点在している。彼らは、国際結婚の家庭に生まれたり、在日外国人、帰国渡日児童生徒であるなど様々な背景を持っており、言葉や文化が誓うということから、日本の子どもたちや学校になじむことが困難である。孤立してしまうことも少なくはない。また、彼らは周りに同じ悩みを共有したり相談できる相手がいない。そのため、一人で問題を抱え込んでしまうことがしばしばみられる。

以上の現状を踏まえ、このプロジェクトは、京都府内の学校に通う帰国渡日児童生徒の学習の支援等を行い、同じようなバックグラウンドを持つ子どもたち同士が交流する機会を設けることを目的としている。参加児童生徒同士が悩みを共有したり励ましあったりできるような人間関係を築き、それぞれが自身の持つかけがえのない個性に気づき、誇りを持てるようになってほしいと考えて活動している。

また、私たちが教員を目指すにあたり、このような児童生徒の存在について知ることや、帰国渡日児童生徒ならではの理解困難な点を知り、指導方法を検討することは重要であり、将来に活かすことができる貴重な経験になると考える。よって、つながる会での参加児童生徒との継続的な関わりの中で、私たちが参加児童生徒の話をよく聞き、彼らの言語面・精神面での成長を細かく捉え、学校現場や外部での援助について考えていくことも目的としている。

さらに、そうした子どもたちの存在と彼らが抱える困り、また支援の方法について、社会に発信していくことも目的の一つである。

2. 代表者および構成員

・代表者

北出萌香 国語領域専攻 3回生

・構成員

高木夏未 教育学専修 M1

鳴橋杏里 国語領域専攻 4回生

岸田茉莉 国語領域専攻 4回生

渡辺優 国語領域専攻 4回生

石井千晴 教育学専攻 4回生

榎木園直子 音楽領域専攻 4回生

鈴木タリネミツエ 理科領域専攻 4回生

稲岡美和 国語領域専攻 3回生

石川稜 国語領域専攻 3回生

高橋桜 国語領域専攻 3回生

柴本愛美 国語領域専攻 3回生

青木小百合 国語領域専攻 2回生

島涼也 英語領域専攻 1回生

前田晴菜 英語領域専攻 1回生

山内莉子 英語領域専攻 1回生

稲岡言美 国語領域専攻 1回生

3. 助言教員

浜田麻里先生（国文学科）

第2章 内容や実施経過など

1. 実施経過

6月 夏の活動企画準備

たけのこ会参加

7月 夏の活動企画準備

たけのこ会参加

8月 夏の活動実施

たけのこ会参加

10月 冬の活動企画準備

たけのこ会参加

11月 冬の活動企画準備

京都ヒューマンフェスタ 2019 参加

たけのこ会参加

12月 冬の活動企画準備

たけのこ会参加

1月 冬の活動実施

2. 実施内容

(1) 夏の活動

<1日目>

場所：友愛の丘、京都教育大学

日時：8月10日

内容：京都教育大学に集合し、貸し切りバスで友愛の丘へ向かった。バスの中では、緊張をほぐすためのレクリエーションとして、2チームに分かれて、ストップウォッチゲームや絵伝言ゲーム、風船爆弾ゲームを行った。友愛の丘に到着次第、昼食であるカレー作りに取り掛かった。カレー作りでは、お米を炊く係や、野菜を切る係など、役割分担をしながら、子どもたち同士で協力している様子が見られた。昼食を食べ終わると、バスに乗り込み、京都教育大学に戻り、レクリエーションを行った。ひっくり返し競争では、再び2チームに分かれ、チーム内でそれぞれ戦略を組み立てた。

<2日目>

場所：京都教育大学

日時：8月19日

内容：午前中は夏休みの宿題を中心に学習会を行った。学習会では、スタッフが子どもたちの学習支援を行い、学校で出された夏休みの宿題をサポートした。昼食は食堂に行き、会話を交えながら食事を楽しんだ。午後はレクリエーションを行った。バスケットボールや人間知恵の輪、しっぽ取りを行い、和気あいあいとした雰囲気での交流を深めた。

(2) 京都ヒューマンフェスタ 2019

場所：京都テルサ

日時：11月17日

内容：昨年度使用したポスターを利用し、会場内のブースにてポスター展示をした。ブースには常駐し、ブースに来ていただいた方への説明や対応も行った。また、他のブースによる人権啓発にかかわる展示やステージでの発表・講演を見て人権問題に対する理解を深めた。

(3) たけのこ会

場所：京都市地域・多文化交流ネットワークサロン

日時：毎月第2日曜 14:00~17:00

内容：たけのこ会は、京都市教育委員会の広報のご協力のもと、京都パグアサフィリピンコミュニティ、京都市地域・多文化交流ネットワークサロンと共同運営している学習会である。対象は主にフィリピンにルーツを持つ小中高生で、パグアサの方たちが子どもたち一人一人に声をかけて集めてくださっている。学生を含むスタッフが個別につき、休憩をはさみつつ16時ごろまでは子どもたちが持ってきた宿題をみたり、こちらで教材を用意して教えたりといった学習支援を行った。勉強をした後は公園で遊んだりお菓子を食べながら話したりと子どもたちとのコミュニケーションを図っている。さらに、最近はフィリピン人の親に対する日本語学習の時間も提供するなど、過程全体への支援も取り入れている。

(4) 冬の活動

場所：京都教育大学

日時：1月5日

内容：午前は自己紹介と学習会を行った。自己紹介では、自らのルーツについて共有することができた。また、学習会では、冬休みの宿題のサポートや受験生の受験勉強が中心となった。昼食は家庭科室に移動し、参加者全員で水餃子を作り、食事を楽しんだ。昼食後は書初めに挑戦し、思い思いに書いていた。その後、レクリエーションとしてしっぽ取りやかるたを行い、和気あいあいと活動している様子が見られた。

第3章 結果や成果など

1. 活動について

(1) 夏の活動

夏の活動では、子どもたちと雑談などを交えながら、コミュニケーションをとることができたように感じる。また、野外活動を取り入れることによって、日本語のレベルにかかわらず打ち解けていた様子が

見られた。

今回の参加者の多くは、昨年度の夏の活動や冬の活動に引き続き、参加してくれた児童生徒であった。引き続き本活動に参加したいという気持ちがあったことが感じ取れ、この子どもたちの居場所のひとつとなることができているのではないかと感じた。

(2) 京都ヒューマンフェスタ 2019

普段外国ルーツの子どもたちのことについて知らなかった人達にもブースに展示したポスターを見て外国ルーツの子どもたちの存在や子どもたちが抱える悩みについて知っていただけた機会になったのではないと思う。また、外国ルーツの子どもたちの現状や課題について議員の方に直接訴えかけられる貴重な機会となった。会場内で行われている講演を聞くことができ、他団体が行っている人権問題に対する取り組みについて知ることができた。

(3) たけのこ会

外国ルーツの子どもたちが直面する学習に関する課題について、少人数制ながらも、きめ細やかな学習支援をすることができた。

また、昨年度から取り入れた母語学習支援のための英語教室では、学校では日本語を話すため日本語の方が話しやすい子どもと、母語の方が得意で日本語は苦手な保護者との間にある会話のギャップを軽減することを目的として運営を続けることができた。また、学校現場ではないボランティアで提供している場だからこそ、学校からの連絡事項が分からない、日本語がうまくなる子どもに対して親である自分が日本語を話すことのできないことへの孤独感といった悩みを抱える親への支援の必要性という視点を持つことができた。

(4) 冬の活動

昨年に引き続き、子どもたちのルーツに関する交流の時間を設けることができた。自分のルーツについて見直すことができるきっかけになったのではないと思う。具体的に自分のルーツを把握できている子や、自分のルーツにピンときていない子それぞれが、ルーツについて考える時間になったので、子

どもたちにとって刺激となったのではないかと思う。

また、レクリエーションではかるたや書初めなどを体験することによって日本の文化を身をもって感じることはできたのではないか。

第4章 まとめと反省、今後の展望など

1. 反省

(1) 夏の活動

今回の夏の活動を通して見えた課題は主に2点ある。

まず一つ目の課題は、子どもたち同士のコミュニケーションの媒介の存在に徹することができなかったということである。自分たちがスタッフとしてレクリエーションに参加したり、昼食中の会話の中で、スタッフと子どもたちのかかわりは多く見られたものの、子どもたち同士のコミュニケーションは比較的少なかったように感じられた。スタッフとして、子どもたち同士がコミュニケーションをとれるきっかけとなるように働きかけていく必要があると考える。

二つ目の課題は、子どもたちとの接し方である。ある程度のコミュニケーションは上手くいくものの、レクリエーションのルール説明や学習支援においては、簡略化した日本語を用いないと、子どもたちの理解が追い付かない場面がしばしば見られた。日本では当たり前で使用している単語も、外国にルーツを持った子どもたちからすると、やや難解なこともある。児童生徒に合わせたやさしい日本語を使用できるように意識する必要があると考える。

(2) たけのこ会

たけのこ会を通じて、自分が持っている外国ルーツという個性について、また、日本人と外国人お互いの「外国人」という言葉に対する考え方について改めて考え直してもらい必要があるのではないかと感じる場面があった。自分のルーツについて再認識するきっかけを作っていくことは大きな課題である。

また、学習支援をするにあたって、私たちの考える「わかりやすい日本語」と日本語が苦手な子どもたちにとっての「わかる日本語」には多少のずれがあることを改めて感じたので、伝わる日本語でコミ

コミュニケーションをとることができるようになると、より円滑に支援をすることができるのではないかと考えた。

(3) 冬の活動

今回の冬の活動では3点の課題が見つかった。

まず一つ目の課題は、参加者の増加に対しての運営についてである。今回の活動では例年のおよそ2倍である参加の申し込みがあった。学習会では、1人のスタッフにつき、3～4人の子どもたちの学習を見ることが求められたので、従来のような子供に合わせた支援を行うことができなかった。レクリエーションでも、全体に向けての指示が通りにくくなっていった。運営にあたって、十分に対応できる人数のスタッフが必要になると考えられる。

二つ目の課題は、男女間の隔たりである。レクリエーションでチームを分けた時に、男女混合にしたがゆえにチーム内で隔たりがあったように感じる。参加してくれた子どもたちの年齢を考えると難しいように感じるが、同じ外国にルーツを持った子ども同士コミュニケーションが図れるような機会を取り入れていけるとなおよいのではないか。

三つ目の課題は、参加者同士で母語により会話が成立してしまったことにより、つながりが限定されてしまったことである。日本語が苦手な子に対して、そのこと同じ母語を話す子がフォローをしてきている場面が多く見られた。子どもたち同士でのコミュニケーションがうまく取れていたことはとても良かったと思う。しかし、日本語をうまく話すことができないというコンプレックスを抱えてしまい、他の子たちとコミュニケーションをとることができていなかったように感じる。一人一人の日本語習得状況に合わせた支援や、よりかみ砕いた説明が必要に

なってくるのではないかと考える。

2. 今後の展望

本団体の活動は今年度で13年目となる。長く続け活動を活発化させてきたことにより、昨年度から京都市や府、さらには内閣府に認められるようになった。活動が評価されたことに対する喜びを感じたとともに、これからより必要とされ、注目されていく活動であることを再認識し、支援を必要とする子どもたちのために私たちができることはなにかを構成員一人一人がしっかりと考えて活動していきたい。冬の活動で参加者が増えたことを踏まえると今後本活動はより外国にルーツを持った子どもたちのニーズが高まっていくのではないだろうか考える。その一方で学生スタッフの数が少なくなってきたため、運営方法の見直し等も行う必要がある。

活動の中で実際に外国にルーツを持った子どもたちと接する一方で、年々いただけるようになってきた多様な発信の機会を活かしつつ、時代に合わせたSNSなどのツールも利用しながら、その中で自分たちの活動の意義やあり方を絶えず見直し続けていきたい。